自分らしい生き方を

A－G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自分らしい生き方を

【Ｎコード】
Ｎ７２０２Ｙ

【作者名】
Ａ－Ｇ

【あらすじ】
所謂マンガやアニメへの転生もの。
主役になるには中途半端な主人公。
というより内面がネガティヴな上、他者に見せる自分もコントロール仕切れずブレている。
人としての軸が定まっていない彼が物語の登場人物と接触し触れ合っていくことで、成りたかった自分に成ることは出来るだろうか？
（鬱陶しいヤツなので成長してくれないと困ります）

プロローグ（前書き）

初投稿です。
拙いどころか拙過ぎる文章です。
ご指摘や感想など頂ければ幸いです。

プロローグ

俺は今、自分の人生を振り返っていた。
というか無理矢理振り返させられている。

俺の目の前には巨大なスクリーンがあり、さながら映画館のように妙に広く暗い空間に俺一人だけが座り、流れる映像を羞恥心とか不快感とか諦観とかをグチャ混ぜにした「いっそのこと殺して下さい」という気持ちで眺めている。

「もう死んでるのに殺してなんてナンセンスだねぇ」

俺が生まれてから幼少期、少年期、青年期と今に至るまでの成長してきた流れを結婚式なんかで使われるようなダイジェストストーリーで編集されているのだが・・・・

「こんなのが結婚式で流されたら千年の恋も冷めちゃうだろうねぇ。花嫁さんからしたら夢から醒めさせられたかな？」

内容は悪意で編集されたとしか言いようがない。
適当な言葉で誤魔化し、嘯く自分。
他人と当たり障りのない付き合いをし、決して本心を明かさない自分。
いい加減で乱雑で卑怯で臆病で見るに耐えない自分。
作り過ぎて着飾り過ぎていい人になるように形作り、そんな自分に自分ですら持て余す。

「自分を見失うってヤツかな？でもそれを冷静に眺める自分にちょっと酔ってる感じ？」

気持ち悪い。

「うん。ぶっちゃけマジキモい」

醜いし無様だ。
吐き気がする。殴り飛ばしてやりたい。
こんなヤツ嫌いだ。
こんな自分が本当に嫌いだ。

「僕も嫌いだねぇ。エヴァンゲリオン観たとき、シンジ君にも同じ気持ちを持ったねぇ。まあ彼の場合は生まれ育った環境に問題があるとフォローを入れてあげるけど。因みに僕はアンチじゃないよ？好きだからこそ苦言を呈すタイプさ」

なんでこんなヤツが俺なんだ。
知れば知るほど、見れば見るほどに嫌になってくる。
悪意を持って編集された映像の中の俺は、俺がずっとこうしてやりたかった気持ちをはっきりとさせてくれる。

「「俺を殺してやりたい」」

「ハモっちゃったねぇ。これまたぶっちゃけ気持ち悪いねぇ。
でも自分嫌いもここまでくると一周回って清々しいかな？太陽系一周して漸く清々しいって感じだけど。あとさっきも言ったけど君死んでるから殺すとか無理だから。ナンセンスナンセンス」

自分が嫌いだ。こんな自分を見たくなかった。自分を変えたかった。
本当の意味で良いヤツになりたかった。

格好いいヤツになりたかった。
だから・・・・

「職業を看護師に選んだんだよねぇ。人のために役立つ自分になろうとしたんだよねぇ。まあそれも失敗しちゃったけど」

涙が出る。膝の上で握り締めていた手を開くことも出来ない。
嫌いな自分を表面だけでも肩書きだけでも良くしたかった。
なのに・・・・

「自分の医療ミスで患者さんを死亡させちゃって、患者さんの遺族に責められ懲戒免職。いよいよ内面どころか外面も取り繕うことも出来なくなっちゃったねぇ。挙げ句の果てに」

スクリーンの映像が変わる。
俺の最後の場面・・・・

「茫然自失で歩いてたところを階段を踏み外して落ちてきた子供を受け止めて転倒。頭の打ち所が悪くてぽっくり。
そして今は僕の前。
うーん、テンプレ乙」

もう涙も言葉も出ない・・・・
いや言葉は出るか。
時間にして約三時間半の『偽りだらけの我が生涯』という無駄に凝った映像を見終わり、座っていた丸椅子を基点に身体の向きを変える。
俺の1メートルほど後ろでソファーにどっかり座った男性と目が合い絞り出すように声を掛ける。

「で、俺はなんで自分の人生の総集編を精神的苦痛アリアリで見せられたんですか？」

明かりが俺の背後のスクリーンだけなので逆光みたいになり、只でさえ陰鬱な俺の顔に更に陰がかかっている。
そして丁度スクリーンに流れる監督から脚本まで全員同じ名前のスタッフロールと同一人物の口に出す。

「その、えっと・・・・神様？」

プロローグ（後書き）

自分で推敲しても全く修正できていない事実。
修正したら涙が出るほど元の原型が保てない。
おかしな点がありましたらご指摘お願い致します。

第一話：向こう側（前書き）

誤字や脱字、おかしなところがありましたらご指摘のほどお願いします。

第一話：向こう側

スクリーンにエンドマークが表示されてから無駄に広い室内が照明が灯る。
（と言っても照明器具らしきものは一切ない）

気がついたら丸椅子に座り、最悪な自分史を延々と見続けさせられていたので実際の室内の広さを確認出来たのは今が初めてなのだけども。

広い・・・・ではなかった。
スクリーンと俺と丸椅子、そしてソファーに座る神様（？）の他はただ延々と真っ白い空間が続いているだけ。
正直、真っ白な空間なんて表現はよく聞く（見る？）けれども、実際に自分がその場にいると発狂しそうになるくらいの異常空間だった。
約三時間半の苦行で磨耗した精神状態には堪える。

「自分の人生を苦行だなんて、君は『目覚めた人』にでもなりたいのかな？だとしたら苦行が足りないねぇ。あと二千年くらい」

ニヤニヤ笑いながら目の前の男性・・・・もう神様でいいか、神様はさっきからずけずけと人の内面に入り込んでくる。

「あの、先程からもそうでしたけど・・・お、私の考えてることが解るのですか？」

というか解るのだろうな。この異常空間は落ち着かないものの、俺の順応性は案外高かったらしい。

会話をする取っ掛かりとして何となく聞いてみたが、これは居心地が悪い。
本音と建て前がバラバラな上、何気ない会話ですら頭の中でシミュレートしてから話す俺としてはコミュニケーションの相手としては最悪の相手だ。

「初対面のヒト（神）を最悪の相手と認識して会話するのは一社会人として如何なものかねぇ」

・・・・ほら最悪だ。しかもやはり心の中を読まれている。
普通、ニヤニヤした顔で裏も表も読まれている相手となんて会話なんてしたくもないだろう。
しかし妙な感じだ。
神様が笑っているのは解るのに、顔付きや体格、年齢や服装といったものを認識出来ない。
何となく男性っぽいと思うのだが、個人として特定出来ないような・・・・自分の人物描写が苦手という弱点が露呈してしまった。いや背景描写とかその他諸々も苦手だけど。
「メタっぽい発言だねぇ」という神様の発言も大概だとは思う。

「まあ君の思う通りでグルグル渦巻く考え通りだよ。人間の一人や一兆人くらいの思考なんてちょちょいのちょいで読み取れるよ。君の『ちょちょいのちょいは古い』って思考もねぇ」

つくづく嫌すぎる相手だ。帰りたい。逃げ出したい。
なるべく平静を保ちたいけど、思考を読まれ、胸の内を透かされるだけでいっぱいいっぱいなのに、異様な空間と対面の人物からくる圧迫感で身体が全く動かない。汗が止まらないし鼓動も早鐘のようにずっと鳴り響いている。さっき俺は意外と順応性が高いとか言ったけど無理だ。

馴染めるものかこんなもの。
所謂転生系主人公の人達はこんな空気の中で神様と普通に会話してるのか？
そんな真似が出来る時点で普通の人間じゃない。
完全に『あちら側』の人種だ。

「君も十分『こちら側』だと思うけどねぇ。君の言葉を借りるなら『大概』だよ君も。
ふぅ、凡人の枠内に居たいのかな？憧れるけど怖いのかな？」

「私は・・」

「『俺』でいいよ、いちいち切り替えてるのが見てて聞いてて気持ち悪い」

「・・・・俺は凡人で普通です。さっきの映像でも再認識しましたし。
いや俺はたぶん普通よりも下です・・・・貴方の言われる通り気持ち悪いヤツです。感情と理性がちぐはぐで思考もバラバラです。適当な言葉と態度と誤魔化しで体面を作ってる人間です」

自分で言ってて嫌になる。何が嫌って、こういう風に言葉を並べて自分を形作ると落ち着いてくるのが。
精神の磨耗云々や汗や鼓動がどうとかも誤魔化せる。
自分を作って逃げ道を作ることに慣れすぎて、作らないと俺は人になることも出来ない。
映像の中の幼少期の自分すらそんな有り様だった。
我ながら気色悪い子供だと思った。
普通の家庭に生まれ普通の両親に育てられたのに、どこでこんな子になったのやら。

育てられ方を間違って受け止めてる。
両親には先立つ不幸より「歪に育ってごめんなさい」と謝りたい。

「過小評価というより過微評価って感じだねぇ」

神様から若干あきれが混ざった言葉が掛けられる。
存在自体は超然としてるのに人間臭さが感じられる。
大体この神様は俗っぽい。
会話の端々にアニメやスラングがちらほら現れし。
そのせいか、格上なのに敬う気持ちがあまり出ない。
失礼にならないように言葉には気を遣うけれども。

「思考を読まれると解っていながら、そんなことを考えている君は十分以上に失礼ではないのかねぇ」

またふぅと息をつかれる。

「い、いえ・・その決して貴方を悪く思ってるわけでなく、あ、あの・・どちらかと言えばお立場を考えるに大変気安く親しみやすい方だと・・」

しどろもどろになりながら必死に言葉を繋ぐ。手振りを加え姿勢も前に出てしまう。
生前は友人（自分の矮小さを知った今となっては自分から友人と言える立場じゃないが）から「冷静で真面目で落ち着いたヤツ」という評価を貰っていたのだが見る影もない。
またしても自分を象るものが上っ張りだけだったと再認識。
死んでからの俺、生前よりも駄目だ。

またもや駄目思考に沈んでいると、神様が笑っていた。

さっきまでのニヤニヤ笑いと違い、楽しいものを見て笑うようにしている。
クスクスと言えばいいのか？
（どうでもいいけれども、その人をはっきり認識出来ないのに感情や表情が理解出来るのはどういった理屈だろうか）
怪訝そうな俺に手を振って笑いながら語りかけてくる。

「いやぁ、楽しいねぇ。君のキャラが壊れ、また取り繕ったあとですぐ崩れたり。
順応出来ない君はどこにいったのかな？
僕に畏怖する君は？
冷静が売りな君は？
主人公達と違い神様（僕）と会話なんて出来ない普通の人間の君はどこかな？
いい加減に気付こうねぇ？
たかだか性格に難があるだけのヤツが神なんて存在会えるわけないよねぇ？
言ったよねぇ？過微評価だって？
神に会って自分の形だけを取り繕う人間が。
ただの人間だと？
はっきりと言わなきゃ解らない？
自分の逃げ道を作る暇があるくらいだから解ってるでしょ？
でもいいよ。言ってあげるよ。
羨ましくて憧れて、でも怖くて受け入れたくなかった現実を。

君は最初っから『主人公』だよ」

第一話：向こう側（後書き）

話が進まない。
何時まで喋ってんだか・・・・

第二話：転生系主人公（前書き）

誤字や脱字、おかしな点がありましたらご指摘のほどお願いします。

第二話：転生系主人公

「俺が『主人公』？」

訳が解らない。
今居る自分の立ち位置から鑑みればそう見えなくはない。

『事故に遭い死亡』

『神様と出会い会話する』

『神様から特別（主人公）扱い』

転生系主人公ものだと言われたらよくあるパターンだと納得出来る。
対象が俺でなければ・・・・

「なんだったら『勘違い系主人公』でもいいよ？
自分は大した人間じゃないと思ってるのに何故か周囲の人達からは凄いヤツだと思われたりねぇ」

クスクス笑いからまたニヤニヤ笑いに戻った神様が、ソファーにもたれかかり足を組み替えている。
だから動作が解るのに体格も服装も解らないなんておかしいだろう。
いっぱいいっぱいな状況が多すぎる。
考えてみたら自分が死んでいるという状態に一切疑問を挟んでない。
もう今更過ぎて蒸し返すネタじゃないんだと無理矢理納得する。
クッションも敷いてない硬い丸椅子に三時間以上座って、いい加減尻が痛いことも今更だ。
大体死んでいるのに痛いやら心臓の鼓動やらもう滅茶苦茶じゃない

か。
展開に流されて忘れられてるかもしれないけれども、生前は俺は看護師だったんだ。
新米だったけど。
こんな現代医療に真っ向から喧嘩を売る状態になっているのに「死んでいるのに生きているんだ俺」と思う自分が嫌だ。
自分を着飾る為になった看護師とはいえ死ぬほど勉強してきたのは事実。
何日も徹夜もしたし、課題やレポート、看護記録なんかを書きまくって二十歳そこそこで肩こりに悩まされ整体通いまでしていた。
苦労してきた生前のことを自分自身でなかったことにしていた訳だ。

看護師を目指した動機も不純で利己的。
働いていた時も患者を見守りながら看護をしながら、自分をよく見せるポーズにしていた。
最低だよ。最悪過ぎるだろう。

何よりも最悪最低なのが、『人一人殺しておきながら、のうのうと事故死してその過失をリセットしている自分』に気付いたからだ。

さっきの自分の映像を見てまだ一時間もたっていない。
死んだから終わったことにしている自分に吐き気がする。
何もない真っ白な空間？
異常だよ、ああ異常異常！
時計もないのになんで上映時間がわかった？
時間の経過が正確に解るのは何故だ？
答えは『よく解らないけど何故か解る』だ！！

ご都合主義もここに極まってる。

なかったことにしていた罪悪感に頭を抱え込んでいた俺を、一言も話さずただ眺めている神様。
自己嫌悪で狂いそうで懺悔する人の気持ちを理解する。

「赦されるつもりも赦されないつもりもない人間が懺悔してもねぇ」

「君はほっとくとすぐ自己嫌悪と自己弁護に走るんだねぇ」と辛辣な言葉を頭上から掛けられる。
神様はいつの間にか立ち上がって俺の前にいたらしい。

「僕から言われるまで『転生』なんて口にしなかったのは、人を死なせておいて自分が助かる逃げ道がある可能性への罪悪感と期待からかな？」

唇を噛み締めながら降りかかる言葉を黙って聞く。

「最低な看護師さんだもんねぇ。まあ僕に言わせてもらえば、お金貰ってその分しっかり働いていたんだから良く見せる為のポーズでも問題ないと思うけど」

「格好いいポーズってね」と神様は笑いながら話す。

「魔法陣グルグルまで知ってるんですか・・・・貴方普段どんな生活を送っているんですか・・」

神様と漫画の趣味が合いそうだ。
絶賛自己嫌悪中（神様の言うように自己弁護中でもある）であっても会話の小ネタに反応してしまう。
本当に俺はどうなりたいんだろう？

漫画や小説の中の主人公。
真っ直ぐでひたむきで格好良くて。
迷っても悩んでも最後には立ち上がる。

嘘ばっかりで逃げ出してばかりの自分とは大違いだ。
死んでからも逃げ出そうとする自分とは本当に・・・・

「格好いいヤツになりたいなぁ・・・・」

「人生二回目の本音だねぇ」

神様が嬉しそうに笑っている。
自分でも確かに本音を言ったと思う。でも二回目？

「看護師を目指す時も言ったよねぇ。
『格好いいヤツ。いいヤツになりたい』
結果は伴わなかったし目指した目標も自分の為の手段に成り下がった。でもあの時の君は二十数年間の人生で一度だけ変えようとしたんだよ。
取り返しのつかない失敗はしたけど、そこまでの努力だけは本物だよ。
神様である僕が保証してあげる」

畜生。赦されるつもりも赦さないつもりもなかったのに・・・・
生前から死んでからまで、今漸く少しだけ救われた気持ちになってしまった。
今更が多すぎるけど。

二十数年間も生きて死んで。
俺は初めて素直な感情を表出して泣いた。

◇◇◇

「で、君の転生先なんだけどねぇ」
大の大人がわんわん泣いた数十分後。
神様は漸く本題に入ったとばかりに説明を始めた。
俺はというと所在なさ気に例の硬い丸椅子に座り直している。
気恥ずかしさがメーターを振り切っているが流石に今回は逃げ出せない。
泣き止んでしまうと冷静になってしまい自分の醜態を思い出し、なかなか顔を上げられずどうしようかまたもや逃げ道や誤魔化し方を考えていたら「知らないのかい？神様からは逃げられないんだよ」とご親切なことに逃げ道に回り込まれた。

絞り出すように「それは大魔王の台詞です」と目と顔を赤くしながら呟き神様の前に座った。
わざわざ冗談を交えて俺が起き上がりやすいように配慮してくれるのが嬉しかった。
でも神様のニヤニヤ笑いを見て、ただその台詞を言いたかっただけだとわかり嬉しさが引っ込んだ。
「候補は３つ。
ひとつめは中世なファンタジーな世界。剣と魔法を武器にモンスタ

ーや魔王を倒すロープレ的な展開」

王道ってやつかな。

俺の考えを読んでか神様はうんうんと頷く。

「ふたつめは現代風ファンタジー。現代社会を基盤としつつ裏の世界には異能と異形があったり色々ね」

超能力バトルとか？

現代の闇に潜む怪異との戦いみたいなものも含むのだろう。

これまた神様はうんうんと頷く。

神様といると会話という基本的なコミュニケーションツールが退化しそうだ。

「最後は最近の転生先でも流行りかな？漫画やアニメの世界に入っちゃうヤツね」

・・・・これまた王道テンプレな。

つまり先の二つだと全く知らない世界行くわけだ。

行った先では何が起きるかわからない。

自分の力で切り開く正に主人公となる・・のかもしれない世界。

この解釈であっているのだろう。神様は両腕で頭の上に丸を作っている。

シュールだ。

最初の頃の威圧感はどこにいったのだろう。

まあ神様は終始ニヤニヤしていただけだし俺が勝手に畏怖していたのかもしれない。

それか単に慣れただけか。

俺もいい加減に力が抜けたように思うし、本音と感情を晒して開き直ったのだろう。

しかし本質が変わった訳ではないので、自己に埋没すればまたドロドロした思考に捕まってしまう。
生まれてからずっと一緒に育ってきたようなものだし、早々割り切れたりはしないし、切り捨てることも出来ないだろう。
というかこういう思考状態がドロドロに入りこむ原因だ。
考えたら沈むし考えなければ先ず動けない。
つくづく・・つくづく自分が嫌になる。
とか言ってる内にまた沈みかけており、神様がポカっと頭を叩いてくれたおかげで頭と思考が浮き上がる。
有り難いけど擬音の割には痛烈な一撃だった。

「さて君はどれにするか決めたかな？
なんて説明した手前で言ったけど、正直君が選ぶ選択肢は解ってるんだけどねぇ」

神様のニヤニヤ笑いももうテンプレだ。
言う前から答えが解られているのは少ししゃくだが、それこそ今更言うことじゃない。
大体俺の答えはそれこそ説明される前から決まっている。
神様の目（おおよその目の位置）を見ながら俺の選択した答えを告げる。

「俺は主人公だと神様が言われましたけど、俺は主人公じゃなくていいんです。
俺は自分が憧れた主人公達をその側で見たい。
その強さや信念、生き様を物語の中で生きる姿を見て感じたい」

主人公の仲間や協力者でなくてもいい。
傍観者を気取るつもりはないけど、共に生きる世界で、世界を守り仲間を守る主人公達を見たいんだ。

「うんうん。了解了解。どの道、三番を選べばひとつめもふたつめも一緒だからねぇ。要は君の立ち位置が変わるくらいだからねぇ」

神様は「まあ、立ち位置がどうとかなんて気にしても無意味だけど」と妙に引っかかることを呟いていたが、それを追求しようとしても「気にしない気にしない」と適当にあしらわれた。

適当な誤魔化しは俺のキャラなんだけど。

「じゃあ後はどの世界するかなんだけど、希望はあるかな？」

考えてなかった・・・・

主人公のいる世界云々とかは考えていたけれども、どの世界に行くかは全くノープランだった。

行ってみたい世界、あってみたいキャラクターはいっぱいあるけれども、みんなみんなみんな叶えてはくれまい。

ここでまた頭を抱える事態に陥るとは。

肝心な時にはいつも俺はこうだ。本当にどうしようもない男だ。くそっ！鬱だ死のう！

「しょうもないところで沈むねぇ君は」

また頭をボカって叩かれた。さっきよりも痛かった。擬音がそれを現している。

「本当はゆっくり決めて貰っても構わないんだけどねぇ。

まだ決めなきゃいけないこともあるし、今回は僕が君にぴったりの世界を選ばせ貰おうかな」

俺は優柔不断なところがあるので、神様のオススメを選んで貰える

のは有り難い提案である。
あれこれ考えたい気持ちもあるので不満がない訳ではないが、それこそ思考の負のスパイラルにまた入り込む可能性がある以上この方が無難だ。
苦しい時は神様頼みだ。本神が目の前にいることだし。

「神的な本音を言えば、いちいち沈んでる君をサルベージするのも面倒だしねぇ」

俺を前にしてぶっちゃけ過ぎだと思う。

「さっきみたいにネコ型ロボットの歌で遊びながら選ばれるのもみていて気持ち悪いし」

そこもぶっちゃけ過ぎだと思う！
そしてその件に関してはスルーして頂きたかった！！

結局神様にお任せした形になったが、行き先については「ついてからのお楽しみ」らしい。

不満はなくはないが不安はそれなりにある。
知っている世界だといいのだけれども。

第二話：転生系主人公（後書き）

転生前からウジウジメジメ回りくどくて鬱陶しい主人公。
おかげで話が進まないったらありゃしない。
神様の読心設定で主人公が喋らなくてもいい分、余計に思考に沈むようなってしまった気がする。
ダウナー系主人公なんて何がいいんだ・・・・

第三話：規格外の能力（前書き）

誤字脱字やおかしなところがありましたらご指摘のほどよろしくお願いします。

今回から文章量が少しずつ多くなっていく予定です。

しかしどうしてこうなった。

第三話：規格外の能力

「さてお待ちかねぇ。
当事者も観客も誰もが一度と言わず二度も三度も夢想し期待する展開だよ。
君はどんな能力を望むのかな？」

「そういう流れになるのかなとは思ってましたけど、本当にあるんですね。転生前のご都合イベント」

正直期待していた。
自分がもし物語に関わるならこんな力が欲しい。
あんな武器を使ってみたい。
最強。無双。チート。
ちょっと痛い妄想なんて誰だってしたことあるだろう。
俺だって中学生くらいによく発症する病と十年以上付き合ってきたんだ。
いい年して胸が躍ったっていいじゃないか。
膝の上で握り締めている手に力が入る。
口元も緩んでいる気がする。
何の因果か自分だけが得られた幸運を嬉しくないわけがない。
でも・・・・

「あの神様、一つ確認したいことがあるのですがお聞きしても宜しいですか？」
「『どうして俺なんかにここまでしてくれるんですか？』かな？」

神様が俺の疑問を、素直に喜べない心情を察してくれる。
俺は単純に喜んだり浮かれたりしてはいけない。

生前の自分は決して真っ当な人物だとは言えない。
それに事故とはいえ人を死なせている。
なのに自分だけが降って湧いた幸運をただ享受することは出来ない。
先ほどより強く握っていた手を一度開いてからまた握る。
じんじんと手のひらに痺れとも痛みとも取れる感覚がある。
この程度の痛みで贖罪を気取るつもりはないけれども、少しでも自分に何らかの罰を与えていないと心が耐えられない。
自分が反省している姿を作っていないと好意も施しも受けられそうにない。

「面倒臭い人だねぇ君は。『ヤッタ！ヤッタ！』と喜んでいればいいのに。
話をちゃっちゃと進めたい僕の気持ちも察してよ」

嘆息する神様に申し訳無さがまた一つ追加される。
思わず「ううっ」と呻き声を上げるけれども、神様の方は俺が気になっていることについて答えくれるらしい。
ふぅと息を吐いてから口を語り始めた。
「この際だから君の疑問や困惑、良心の呵責なんかを纏めて解決しちゃおう。
先ず一つ。君が死んで僕の前に来たのは偶然でも幸運でもましてや僕のお情けでもない。
最初から決まっていた決定事項だよ。
僕は言ったよね？普通じゃないから君は此処にいるって。
君は生前過ごしてきた世界にとってイレギュラーなのさ」

イレギュラー？俺が？なんで？
想像もしてなかった答えに反射的に身体が浮き、その反動で丸椅子がガタッと音を立てて倒れる。
神様は俺に手を翳して立ち上がるのを制する。

丸椅子を直して座り直すが流石に落ち着いてはいられない。

「イレギュラーなんだからそうとしか言えないねぇ。
あぁこれは別に君が死ぬ間際に助けた子供のことは関係ないよ。
あの子は君と違って普通の人間。完全無欠の一般人だよ。
それこそ君が助けず死んでいたって全く世界には影響はない。
後世にも響かない」

「助けてくれた君が死んだことでトラウマなり罪悪感なりは生まれたかもねぇ」と意地悪く続ける。
あの子を俺の現状に対する理由にするつもりはなかったけど、死んでも構わないように言われると不快に思う。
助けたことがあの子にとって悪いように聞こえるから尚更だ。
そんな俺の様子を見て肩をすくめる神様。
眉間に皺が寄り睨むように前を見るが全く気にされていない。

「そんな顔されてもねぇ。僕にとってただの子供の一人や千兆人死のうがどうなろうが本当にどうでもいいんだよ。
人間の感覚で神（僕）をはからないで欲しいな。
別に僕からすれば人間なんて虫けらとか塵芥だなんて思ってないしねぇ。
人間は人間。
虫けらは虫けら。
しっかり線引きして混同はしないよ。

それに君の死云々があの子供に影響与えたからってなんだい？
トラウマになるかもしれないけど、それで塞ぎ込むのも助かった命に報いるのもあの子次第だよ。
助けた責任を持ち出すのは格好いいかもしれないけど、死んでまで気にすることかい？

なんだったらあの子の夢枕に立って『助かってくれて有難う！俺のことは気にせず楽しく生きてくれ！』って言いに行く？それで満足するのは君であって君だけだよ。
利己的で自分本位な人間を気取るなら、助けた結果だけに満足して後のことなんか省みないようにねぇ。
善行も偽善も悪行も偽悪もやるなら徹底的にやってねぇ。
中途半端は君のキャラクターだけどやられた方は困っちゃうよ」

・・・・一気に虚仮卸された。
善いことをして説教されるなんて理不尽過ぎると思うけど、呆気にとられて眉間どころか唇や手や身体中から力が抜けている。
だらんと四肢を垂らし口を半開きにしている俺はさぞかし間抜けに見えることだろう。
反論する気も失せた。
俺の思考と心情を読み取り、わざわざいらぬ説教をさせられた神様も「あーあー」と喉を押さえながら発声し仕切り直している。
説明を脱線された意趣返しも含めた説教だったのだろう。
神様の癖に器量が小さい。
とは言え俺の思考にいちいち付き合ってくれるのだから神（ヒト）がいいのかもしれない。
他人の思考を読めるなんて便利に思えたけれども、俺を相手にしている姿を見るとコミュニケーションツールとしては不便極まりないな。
面倒臭いと言いながら面倒見がいいのは神様の性格だろうか。
難儀な神様だ。

「あーあー、うん。よし話を戻すよ。
君はイレギュラーだって言ったけど、その理由を説明したげる。君は君が居た世界にとって規格外なんだよ。
笑っちゃうくらいに規格外。

その気になれば現実世界に君臨する魔王になれたかもねぇ。
ねぇ？規格外（ファンタジー）でしょ？
幸か不幸か、君が中途半端な卑屈人間で外見を飾る程度にしか能力を発揮してないから問題はなかったけどねぇ。
死んだ後の魂だけでも規格外だったから、肉体を失い制御不能の無意識状態で力を発揮して世界に影響を与えようとするんだもん。
何が起きたか教えて欲しい？あぁ怖がらなくても大丈夫。被害は全くないよ。僕がすぐに拾いに行ったから。
ちょびっと洩れた力のせいでみんなびっくりしただろうねぇ。
一瞬だけ地震が起きたんだよ。揺れたような気がしただけだろうねぇ。安心した？
でもね、もしそのままにしてたら・・・・」

生まれてきてすみません。
死んでしまってすみません。
日本の皆さんごめんなさい。
そして生きとし生けるもの全てにごめんなさい。
どうやら俺は正真正銘の規格外（イレギュラー）だったようです。
なんたって・・・・

「もしそのままにしてたら、日本沈没していたからねぇ」

全く笑えないよ神様。

◇◇◇

「まあそんな君だから僕の前に居るわけなんだよ。わかったかな？」

丸々全て信じたわけではなかったけど。
最初に見せられた最悪な自分史を初め、この不可思議空間での神様との不可解コミュニケーションを通して、もう大抵の異常なことに慣れてしまった。
これだけ異常なことが連続して起きているんだ。転生系主人公に自分がなるくらいなんだ。
元々自分が異常だったことくらい受け入れるさ。
もうどうにでもしやがれだ。

「諦観しちゃってるねぇ。気持ちは解るつもりはないけど解ってあげるよ」

神様の軽口にも返す気力はない。
なんかもう罪悪感とか転生することへの期待と不安とかもどっか行ってしまった。
今の俺は虚脱感に抗うことなく丸椅子から下りて地べたに胡座をかき、動物園のパンダ宜しく丸椅子を左手でゴロゴロ転がしながら遊んでいる。
なんだか久しぶりの逃避だ。常に自分を取り巻く世界から逃げながら生活していたあの頃が懐かしい。

「そのままでいいから話を再開するよ？」

しかし死んだら日本沈没ってどんな存在だよ。地球破壊爆弾か俺は。
「つまり君が転生するっていうのは必要な処置なんだよねぇ。世界を守る為みたいな。これだけ聞いたらなんかヒーローみたいだよねぇ。スーパーヒーロー伝説」
しかしイレギュラーか・・・・
何というか、元々俺は世界にとって規格の外だったんだなぁ。
いらない子じゃなくていてもらったら困る子。
世界規模で家無き子か・・・・
「だから君の異常な力がある程度容認される世界に行く必要があるんだよねぇ。
そう意味では所謂王道転生物の異世界や超常現象満載な物語の世界はうってつけなんだよ。異常が正常な世界だと受け入れる世界の懐も大きいからねぇ」
元々自分が不必要だと思えば、かつての世界への未練もなくなると言うものだ。
それでもこんな自分でも愛してくれた人達が居た世界から完全に去るのだから郷愁の念は消え去らない。
生前は実家に殆ど帰らなかったけど、二度と帰れないと解ると急にホームシックになる。
母さんの手料理が食べたい。
父さんとお酒が飲みたい。
妹と対戦ゲームをしながら喧嘩したい。
飼い犬（名前ワッフル雑種八才メス）と散歩に行きたい。
思いっきり未練たらたらじゃないか。
「まあ大体の君の疑問にも答えたし、半端な呵責もどうでもよくな

ったことだし、最初の最初に戻ろうかな？
転生先に必要な能力を幾つか選んで、君の能力を制限しないとねぇ」

あー、なんか座っているのも疲れた。寝転がってしまおう。
床が冷たく気持ちいいな。手でさすっても床の材質なんて解らないし何で出来ているんだろう。神様鉱物だろうか？
それにしても真っ白いと病院のリノウムを思い出す。
そういえば俺が急に辞めることになって夜勤のシフトの変更とか大変だったろうな。
つくづく迷惑かけっぱなしでいなくなるんだな俺は。
・・・・そろそろ起きるか。いくら虚脱状態だったとは言え神様のまえで寝転がるなんて不遜極まる。
失礼にならないようにとか考えてた癖に随分な醜態を晒してしまった。
丸椅子は転がし過ぎてちょっと離れたところにある。
立ち上がって取りに行くのも億劫だし、反省の意を含め床に正座しよう。
神様をお待たせするのも申し訳ないし。
自分の能力も決めないといけないな。
最強もチートも俺の性格には合わないし、可もなく不可もないバランスのとれた能力にしよう。
すでにいくつか候補はあるし。
あとはそれに合わせて自分の能力を制限して・・・・

えっ？

「思考の怠惰の海からお帰り。能力の候補もあるようだし、ちゃっちゃと決めてちゃっちゃと制限しようねぇ」

「ちょっ！ちょちょちょっと待って下さいっ！！俺能力を貰えるんじゃないんですか！？しかも制限って！？」

俺の存在は規格外で魂だか何だかが爆弾らしいのだけれども、あくまで俺の身体や知識は一般人のそれでしかない。
寧ろ運動音痴で体力もあまりない方だ。
こんな状態から更に制限がかかって超常世界に転生なんて無理ゲー過ぎる。
第二の人生が始まる前からバッドエンドだ。
制限プレイをするくらいなら最強チートの方がいい。
ものの数分で正座を解き神様に詰め寄った。
生まれ変わる前から命の危機だから仕方がないだろう。

「うーん、中途半端が君のキャラだって解ってはいるけども、理解力の中途半端さは結構面倒だねぇ。
ま、誤解しやすい発言をした僕も悪いか。メンゴメンゴ。
もういい加減能力の話をしたいし巻いて説明するよ。巻き巻きで」

嘲りと心が籠もってない謝罪を言い、さも面倒だと言わんばかりに神様は右手をヒラヒラと降った。
瞬間、前傾気味に詰め寄っていた俺の身体は土台に立てられた細い鉄の棒を弾いた時のようにビーンと微かに震えて直立不動の状態になった。
指先一つ、口先すら動かない。
読心以外では初めてみた異能力だけど。
実際すごい力だけれども。
こうまでするくらい俺の対応は面倒なのか。

扱いが雑過ぎる。

「言いたいことは僕が言いたいことを言ってから言ってねぇ。
まあ聞き終わったら反論する気もないだろうし僕もまともに聞く気はないけど。
先ずは制限についてだけど、さっきも言ったように君はイレギュラーだねぇ。
それは君の居た世界にとっても、今から転生する世界でも一緒。
だってあちらは元々完成している世界だ。
居るはずのない登場人物はまさしくイレギュラーだろう？
君が行っても問題ないのは確かだけども、それは空いた部屋に居候するようなものなんだよ。
要は『来てもいいけど迷惑かけんなよ？』ってこと。
といってもその辺は流石は物語。最初はその世界がちょこっと嫌がらせしてくるかもしれないけど、何年かすれば落ち着いてくるから。
世界も愛着湧いて『遠慮すんなよ。お前だって俺の家族さ』みたいな感じになるから。物語の世界はあっさり危機に陥る癖にいざという時は懐が大きくデンと構えてくれちゃうからねぇ。
話を戻すねぇ。
居候先に行くには沢山荷物を持っていくと邪魔になるし迷惑になっちゃうよねぇ？
君の場合はその溢れんばかりの無駄パワーが荷物なんだよ。
だから必要最低限の荷物を置いていく（制限）必要があるのさ。
解ったかな？
まあ確かに今まで平凡と言える日常を送ってきた君だから、使ったことのない能力を制限なんて言われたら焦るよねぇ。
僕も配慮が足りないねぇ。ごめんちゃい。
でもね、力を解放した君はとんでも野郎なんだよ？
今の君を１とするとあちらの世界じゃ１００万なんてことなるんだよ。

あちらの世界の一般人も基本は君と変わらない普通の人。
あちらでは一万超えたら伝説クラス化け物だって言ったら、僕の言ってる意味も理解出来てくるよねぇ？
普通の居候先に宮殿持って行くわけにはいかないよねぇ。
回りくどいかな？気付いたけど僕も大概面倒なタイプだねぇ。人のこと言えないね。ゴミンゴミン。
という訳で、君の力を最低でも百分の一まで制限するよ。
勿論ちゃんと能力は解放したげるから。
それじゃ・・うん終わり。解放して制限したよ。
その制限は僕しか解けないから実質永遠に解けない。
身体が動かないまだ実感ないだろうけど拘束が解けたら試してみたらいいよ。
自分にドン引きするから。
あとは使用する能力や身体能力について教えてあげないとねぇ。
身体は基本的に頑丈、俊敏、怪力、反射や感覚機能なんかも超人扱いされるかな？
大丈夫。あちらの世界も大概超人だらけだから。
フルパワーでも出さない限りは大丈夫。
ん？フルパワーと通常と境界？
うーん・・あー・・面倒臭い。もうアレだ。界王拳で行こう。
フルパワーが界王拳２０倍ね。上限だけ分かればいいでしょ？あちらには気の概念があるから丁度いいや。いいじゃない。男の子の夢だよねぇドラゴンボールは。
かめはめ波は使いたかったら自分で練習してねぇ。
という訳で使用能力の一つは界王拳で決まり！
あーちょっと喉乾いたかな？ずっと喋り通しだからねぇ。
まあ僕は神様だから喉乾かないんですけど。ヨホホホ！
えっと後は魔法関係かな？あちらには魔法があるからねぇ。
魔法使いになれるよ？やったねぇ！でも大っぴらには使えないからコッソリ使ってねぇ？

あちらの魔法の知識とか技術いる？使ってみたい魔法なんかがあるならそれでもいいよ？
でも君はあまりゲームとかの魔法知らないんだねぇ。小難しい詠唱とか大変そうだしねぇ。
アレ？でも君何気に十周くらいしてるゲームあるねぇ？
『ファイナルファンタジータクティクス』か。いいねぇ。僕もあのゲームは大好きだよ。
ただのファイナルファンタジーと違って詠唱文もあるじゃない。
やっぱり魔法詠唱文は人類の夢だよねぇ。
うん！魔法はそれで行こうか。
黒魔法、白魔法、時魔法、陰陽術。あと刀の引き出すもつけとこう。
勿論刀もセットであげるよ。サービスじゃないよ？刀を生み出すのもまた君の力を使ったからねぇ。
刀は痛い男子の夢だからねぇ。ちゅーにちゅーに。
ついでに聖剣技と暗剣技もつけておくねぇ。拳術もあれば安心でしょ？
ん？心外だねぇ、勝手に決めてないでしょ？
ちゃんと君の思いのままに選んでいるんだから。
最強とかチートとか嫌いな癖に随分とまあいっぱい考えてたねぇ。
プププ。
『型月』を選ばない辺りに拘りかプライドがあるのかな？
別に怒っちゃいないよ？『さっきから笑い方とかが古臭いし鬱陶しい』って思ってることも気にしてないからねぇ？
大体こんなものかな？あと何かいるのかな？
・・うんうん。
流石に過去やら失敗を引き摺る男は違うねぇ。
そっか本当は最初にコレを選ぶつもりだったんだ。
偽善的でいいんじゃないかな？
馬鹿にしてるわけじゃないよ？
今度は間違わないようにしたいもんねぇ？

何事も正しい知識と正確な技術、そしてそれを扱う強い意志だからねぇ。
君の場合は最後のが足りないけど、そこまでは僕はしらない。自分で間違わないように使えるようにねぇ。
ふぅー終わった終わった。お疲れ様、僕。
君の為にこんなに頑張っちゃって好感度が鯉のぼりだねぇ。
鯉が竜に変わるくらいののぼり具合だよ。
もうちょっとしたら身体の拘束が解けるから色々試してごらん？
僕は君の転生する世界を調整してくるから。
じゃあまた後でねぇ」

俺が気が付いた時には真っ白な空間に独りきりだった・・・・

第三話：規格外の能力（後書き）

ずっと神様のターンだぜっ！！

主人公はラカンさん方式でみると最強チートもいいところですが、
力を扱う技術や知識がからきしです。
子供先生と同じく経験を積んで強さを不動なものになるはずです。
多分。

神様が扱いやすいのでついつい甘えてしまいます。
いい加減転生させたいと思います。

ペットの犬の名前が主人公より先に登場する有り様。
未だに名前も容姿さえ描写されないし。
主人公ェ・・

第四話：人生再出発（前書き）

誤字脱字、おかしな点がありましたらご指摘のほどよろしくお願いします。

文量は少な目にまとめました。
適当な字数はどれくらいなんでしょうか？

漸く此処まで・・

第四話：人生再出発

神様の一方的なようで俺の意向や主張なんかも適度に加味された協議の末に得た能力は思いの外・・

「は、恥ずかしいな・・詠唱や技の名前を口にするの」

二十代半ばの成人男性にはキツかった。

◇◇◇

神様に放置されてから約十分後。

本来なら此処に来た直後に思うであろう感想を述べた後、とりあえず自分の能力について確認をする。

神様曰わく、溢れんばかりのパワーやら気やら魔力やらがあるらしいのだが、漫画やアニメのように身体からオーラが浮かぶことも無ければちょっと力んでみても身体がプルプル震えるだけで何も起こらなかった。

真っ白な空間で中腰でよくわからない俄か拳法の構えをした成人男性が、数分間プルプル震えながら力む姿はさぞかしシュールだっただろう。

気や魔力は後々練習するとして、身体能力がどれだけ向上したのか

を調べることに切り替える。
先ず腕力。何か持ち上げてみようと思い神様が座っていたソファーに手をかける。
真っ白い空間に無駄な存在感をかもす、黒革張りの大人三人はゆったりと座れる高そうなソファー。
横幅があるため、力自慢の人でもバランスが取りづらく浮かせるくらいが精々だろう。
前の俺なら引き摺るだけで精一杯だ。
先ほどの気や魔力の失敗もあり、何も起こらなくても恥ずかしくないように背もたれ側から底の部分に手を入れ「軽く」力を入れ持ち上げてみる。

「よっ・・と？」

手のひらや腕にはそれなりに重みがある物を抱えている感覚がある。
しかし自分が腕に込めている力は空のダンボールを持ち上げている程度しかない。
恐る恐る右手をソファーの重心に当たるような場所へ滑らせ左手をゆっくり離す。
まあつまり、右手一本で成人男性では抱えられないソファーを持ち上げているわけで・・
そこからなんとなーく指を一本ずつ浮かせていき・・
最終的には人差し指だけで、イタリアンのシェフがピザ生地を浮かせ回すようにソファーをクルクル回転させいる俺がいた。

◇◇◇

「俺！自分が怖いっ！！」

「何だか自分に秘められた力に戸惑い、恐怖する主人公みたいな台詞だねぇ」

いや、もう有り得ないくらいの身体能力だわ。
あの後も神様が戻ってくるまで自分の身体能力を確認してみたのだが、もう異常事態のオンパレードだった。

指先でソファーを回していたが、バランスが崩れ床に落としてしまった。
その時に「ズドン」と決して軽くない物体が落ちた音がするものだから流石に顔が引きつった。
腕力が上昇しているのだから脚力も同じように上昇しているわけで。
爪先をソファーの下に引っかけてリフティング感覚で蹴り上げたら、１０メートルくらい上までソファーは吹き飛び落下して大破。
壊れたソファーの残骸から握り拳大の破片を取り出し、遠く投げたソレを走って追いかけてたら、落下する前に悠々とキャッチ。
今度は思いっきり遠くへ投げてみたら弾丸のような速さで飛んでいき、またソレが数キロ先まで飛んでいっているのにしっかり視認出来ている事実に今度は顔が引きつるのではなく強張った。
意識しても表情筋が動かないこともあるのだと学んだ。

そして冒頭の一幕。
どうせ一人しかいないのだと開き直って思いっきり技名を叫んでみた結果・・

「『かぁぁいぃおぅぅけぇぇぇんん！！！』ってやってみたんだねぇ」

「お願いだからっ言わないで下さいっ！！」

今度はしっかり発動し、強化された脚力で蹴っても傷付かなかった床が発動した瞬間ひび割れた。
更にはよくみたら薄赤い陽炎みたいなものが身体を覆っていた。
この状態で何かを試す勇気はなかった・・・・

「いくらなんでもびっくり超人過ぎますよっ！？こんな身体能力のキャラクター、ドラゴンボールの世界でしか適応出来ませんって！？よくある原作破壊なんてレベルじゃなくて漫画の世界そのものを破壊しちゃうでしょっ！！？」

転生主人公が「原作のキャラの百倍強く！」とか言ってたのを見たことあるけど、お前は馬鹿かと丸一日かけて説教してやりたい。
漫画のキャラクターを常識の枠組みで測っても無意味だとは解る。
だけども、こんな不条理な人間が近くに居て巻き込まれたら絶対死人が出る。
今の俺が本気で街中を疾走したら戦車がＦ１並みのスピードで走り回るのと変わらない。
これで本当に制限されているのだろうか・・

「それは勿論。今の君は本来秘めていた力の百分の一以下。確実に弱っちくなっているよ。地球に来たばかりの頃のベジータより少し上程度だねぇ」

つまり一人で地球を滅ぼせるくらいってことじゃないか。
日本沈没なんて片手間で出来そうだ。
地べたに座り頭を抱える。
死んでから俺は何回頭を抱えたんだろう。

最強チートはいらないって言ったじゃないか・・

「力に自惚れられるのも頂けないけど、力で鬱病になられるのも困るねぇ。
まあ心配しなくてもその内馴染んで上手くコントロール出来るはずだよ」

楽しそうに笑いをかみ殺しながら話す神様。
どうでもいいけど貴方ニヤニヤ笑いが標準装備じゃなかったのだろうか？
長々と独り語りしていた時もそうだったけど、この神様もキャラがブレてるように思える。
人としての軸がうどんかなんかで出来てそうな俺が言うのも何だけど。

「ところで、僕が戻ってきたということは転生の準備が終わったってことなんだよねぇ。もういつでも行けるけど君は準備出来た？」

そういえば神様は何かしらの調整に行っていたのだったか。
正直、心の準備も身体の準備も万全とは言い難い。
魔法に至っては試してすらいない。
かと言って、時間をかけてもこれ以上どうにかなるとも思えない。
・・なるようにしかなるまい。
立ち上がってズボンのお尻を手で払って神様の向かい合わせになる位置につく。

「不安はありますけど、此処に居るのも落ち着かないし・・転生お願いします」

真っ白な空間に長居するのは俺の薄弱な精神に良くない。

神様にも悪い・・「そうだねぇ。ソファーも壊されちゃったし」からね・・
弁償しろとか言わないよな。死んでるから財布とかないよ俺。
「転生しちゃうと僕と会えないからねぇ。聞きたいことがあるなら、これが本当に本当の最後だよ」

弁償は大丈夫かな。
どうせ考えが読まれるのだから心の中で謝っておく。
あと聞きたいことか・・・・

「転生先は日本とか外国とかって分かります？最悪でも言葉くらいは通じて欲しいんで・・
あと俺の他にも転生してくる人っていますか？」

「君の転生先は日本だよ。現代の日本語で問題なく通じるよ。
あと君の行く世界は君一人受け入れるだけでキャパがいっぱいだからねぇ。これ以上の来客はお断りだってさ」

少しホッとした。神様相手だと言葉がなくてもコミュニケーションがとれるから安心していたけれど、生まれ変わった先で言葉が通じないのはかなり困るだろうから。
それに他の転生者がいないのも安心要因だ。
俺がしたいことは俺なんかとは違う格好いい原作主人公達の活躍を見たいだけ。
原作に介入したり破壊したりするのは御免だし、他の転生者に滅茶苦茶にされるのは困る。
かといって敵対なんかしたくないし、平和的に無難に過ごせるなら万々歳だ。

「有難う御座います。もう確認することもありません。
何だか色々ご迷惑かけてしまい申し訳ありません。
これからは自分の力で頑張っていきます」

「・・うん。どう致しまして。今の言葉も本心からだねぇ。
自分で言うのも何だけど、神様なんて胡散臭い存在とまともに向き合ってくれた君にはそれなりの好意をもってたよ。
暇を持て余した神様の遊びに付き合ってくれて有難うねぇ」

「俺とは遊びだったんですか？」

互いに軽口を言い合い笑いあう。
俺の表面を無視して内面を散々荒らしてくれた存在だが、本心をさらけ出して会話したのは本当に久しぶりだった。
厳しいし容赦もないけど楽しかったと思うし嬉しかったとも思う。
だから自然と感謝することができて頭も下げられる。
もし自分を変えることが出来たなら、本心を打ち明けられる友達を作ろう。
生前より少しでも真っ当な人間になれるように。

「じゃあ送るねぇ。
君の新たな人生に幸多からんことを。
前世の最後の友人として君に神の祝福を」

んなこと言うなよ・・泣きそうになるだろうが。
ゆっくりと俺の足元から光に包まれていく。
では行ってきます神様。

「あー、最後に一つ訂正しておくねぇ」

なんだろう？
今うっすらと涙目な上、思いの外光が眩しくて目がチカチカしてるんだけど。

「最初に見せたあの映像なんだけど。三時間半もないよ。
精々二時間ちょい。
何でそうな風に思ったのかしらないけれど、君が時間が解るとかこんなおかしなことあるかーとか痛い勘違いしてたのが気になったねぇ。
そこまで指摘するのも可哀想かなって思って話を合わせて黙っていたんだけど、言わないままだと僕がスッキリしないから伝えとくねぇ。
次の人生じゃそんな痛い思い込みや勘違いはしないように気をつけてねぇ。
そんじゃねぇ！バイビー！」

言いたいことは山ほどあるし、ツッコミたいことも腐る程ある。
強化された身体能力のフルパワーでぶん殴ってやりたい気持ちだって溢れんばかりだ。
もう光が身体全体を覆い隠そうとしており、強い光で目を開けることも出来ない。
光の向こうにあのニヤケ面があるかも解らないし、俺自身がすでに消えている可能性もある。
それでも・・

届かないとしても・・

伝えたいことが俺にだってあるんだ！

「お前の『ね』の時だけ語尾を伸ばす話し方だって十分痛々しいだろうがぁぁっ！！！」

意識が薄れゆく中で俺、次の人生では『ちゃんとしたまともな友人を作ることを決意した。

第四話：人生再出発（後書き）

やっと転生です。
と言っても転生先についてすらいないのですが・・・・

主人公の身体能力は転生後一旦低下させます。
初っ端からアレでは流石に・・
でも一般人と異能者の境目辺りにいる古とか頭一つ抜け出してる楓や刹那だって無茶苦茶な身体能力ですよね。
強すぎないくらいってどれくらいの能力なんだろう。

主人公は最後まで名前も容姿も描写されなかったなぁ。
ちょっとくらい描写しようか迷ったんですけど、どうせ転生してからが本当のスタートなら今は要らないだろうと結論付けました。

無色透明な主人公と外見無しみたいな神様との絡みだけ。
自分でもラジオを聴いてるような文章だと思いました。
色々な意味で真っ白な世界です。

切実に文才が欲しいです・・

１１／２２
主人公の能力に合わせてタグを少し追加しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7202y/

自分らしい生き方を

2011年11月22日02時02分発行